
鳩梨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【Nコード】

N1823B

【作者名】

鳩梨

【あらすじ】

《幻想》これを読み、【あなた】が何を思うか。何かを思えるか。気付くことは出来るか？これは《幻想》

(前書き)

読み手の確固たる意思で読んでください。【彼女】の話をちゃんと聞いてください。『私』は一切の責任を負いません。理解と承知の上で読んでください。――読まないことが、あるいは正しい選択かもしれません。

いいかしら？

これからお話するのは《幻想》

現実では起こりえない、けれど人々が想い止まない物語。
現実には無く、けれどそれを在るかのように心に描く

———《幻想》

病的な現実主義者は席をお外しになってくださる？

狂信的な夢想家は不愉快な気持ちになってもいいのなら、どうぞ
ご堪能を。

虚無的な【あなた】はどうするか、ご自分でご決断なさいな。

それでは始めましょうか？

ファンタジーにもなれない、くすんだ《幻想》を———。

昔々のこと。地上には唯一とも言える楽園がありました。

そこには一年中春の陽気が眩しく零れ、花々はお日様に向かって
色とりどりの鮮やかな花弁を、これでもかとばかりに力強く、優雅
に広げています。

人々には笑みが絶えず、音楽と絵画を愛するその心は穏やかで、
隣人を愛することはしても、憎むなんて事はしないのです。

人々は満たされ、不足や不満を感じず、安心を抱いています。
誰もが皆、仲がよく、愛し合っているのです。

——けれど忘れてはいけません。

——万物は流転するが定め。

——そこで、そのまま、止まることなど無いのです。

——ご存知でしょうか？

——世界は不平等という仕組みで成り立っているのです。

——幸せの比率が大きければ、その反対。不幸は、より大きくなるのです。

「なぜですか!？」

とある小さな村。

その村にある小さな教会。

その教会には一人の男だけが居ました。

時刻は夜。いいえ。深夜といってもいいでしょう。人々は今日も満足におなかを満たすことも無く、明日こそは、そう思っても今日と同じ——もしかしたら今日よりも貧しい明日がくることを知っており、夢や希望を忘れたまま、未来を絶望したまま眠りに^{あす}についている時間。

男はそんな時間に、涙を滂沱と流しながらずっと問い掛けているのです。

「なぜですか!？」

と。延々。休むことなく。何度も。何度も何度も。そこにいるという神様に向かって。

男に抱かれるようにして、一人の少女が眠っています。その少女の顔に生氣はなく、血の気の無いそれはまるで人形のようにです。

「なぜですか!？」

男は問い掛けます。滂沱と涙を流しながら。その胸に少女の死体を抱いて。

これで、果たして何人目になるのでしょうか。この村で幼い命が失

われるのは。

たった一つのパンでもよかった。

一摘みの果物でもよかった。

野菜でもよかった。

魚がほしいなどと贅沢は言わない。

肉がほしいなどと贅沢は言わない。

ただ、ほんの少しでもいいから栄養のあるものを。育ち盛りの子ども達が生きていけるほどの。親に捨てられない程度の食べ物があれば……。

——この村は、今飢饉に晒されています。いいえ。ここだけではありません。この村の属する国、近隣諸国。飢饉という風は世界を覆うかのように吹き荒れているのです。

稲は枯れ、木は朽ちて。

川は汚れ、海は渾濁。

獣たちは共食いをせねばならぬほど。

人間も、例外ではないのです。

ある町では、ついに人の死骸を食べなければならない所も在るといいます。

ある村では、ついに人の垂れ流した糞尿を食せねばならないほどだといえます。

だから、そう言った意味では男の居る村はまだマシだと言えます。子どもを犠牲にするだけで、十分とは言えないまでも食にありつけるのですから。

「なぜですか!？」

男は問いかけつづけます。答えが返ってくるなどいらないと言うのに。長年仕え続けた主に、ただ「なぜか」と。滂沱と涙を流し。胸のやるせない気持ちを押さえ込み。ともすれば、子を捨てる親たちに自ら手を出してしまいそうになる激情を押し殺し。答えなど返ってこないと理解していながら、男はただ問い掛ける術しか持たないのです。

「なぜですか!？」

――そう。これが不幸の大きさ。その一端。

――これが全てではないのです。

――楽園が幸せで在る限り、それ以外の全ての場所は不幸なのです。

――その幸せの大きさゆえに。

――けれど、言ったように。

――万物は流転するのです。

――幸福も不幸も。そこに止まることなど決してありません。

――幸福が訪れているのなら、そう遠くない未来に、今度は、不幸が訪れるでしょう。

――不幸が訪れているのなら、そう遠くない未来に、今度は、幸福が訪れるでしょう。

――なぜ、そう言いきれるのか？　ですって？

――それが真理で、唯一の、万人が、万物が、定めて、今も尚、頑なに守っている、

――法であり、約束だから。

――法を破れば、罰せられるでしょう？

――約束も同じ。守らなければ、とても痛い目にあうのです。

さあ、では、続きを。

ついに、捨てられた子供たちは皆、死んでしまいました。

男は子ども達の墓標の前で。

瞳から涙は枯れ。

——男は身を費やしました。遠く離れた異国の地までひた走り、日帰るという無理もしました。けれど、何処へ行こうとも、他者に、一欠けらのパンを恵む事すらできないのが現状です。

——男は身を費やしました。自らの肉を血を、子ども達へと出すと言うこともしました。

——男は身を費やしました。ついには盗みすら働いたのです。けれど、そのどれもが空しく。子供たちは死んでしまいました。やわらかな笑みのエリシア。彼女は最期、笑みを浮かべることは出来ず絶望に染まった顔で息を引き取りました。

丸顔のジョルジュ。彼は最期、痩せ細ったその顔はかつての面影が無いほどにこけて、泣きながら、涙も流れず、それでも泣きながら息を引き取りました。

誰よりも優しくかったミシエル。彼女は自らも空腹で痩せこけていると言うのに、自らの分を幼い子達へと分けてあげていました。最期は、ごめんね。と謝りながら息を引き取りました。

他にも、大勢の子達が、空腹で見えるも無残に痩せこけて、骨と皮だけになり、死んでいきました。

——なのに、何故、私はこうして生きているのだ……。

枯れて乾いた瞳からは、赤黒い血が流れ、荒廃した大地へと空しく染みを作っていく。

男の中には、何処へ向ければいいのかもわからない怒りと、悲しみだけがひたすらに渦を巻いています。

今度は、村の大人が、一人、また一人と死んでいきます。

けれど、男はもはや祈ることをやめていました。

ただ、自らにも死が訪れるのを、ただ、虚ろに待つばかりです。

——けれど、男にはまだ死んでもらっては困るのです。

——男には、悲しみが在ります。怒りが在ります。悼みが在ります。哀しみが在ります。

——男には、犠牲の上での幸福を満喫する樂園の者たちを裁くだけのモノが在るのです。

——男には、犠牲を知らず安穩と暮らす者達を裁く権利があるのです。

——責務と言ってもいいでしょう。

——さあ、物語の駒として、立ち上がりなさい……。

ある時、ついに男は死ぬように眠りにつきました。

そこで、彼はある光景を目の当たりにしました。

それは夢だったのかもしれない。

それは幻覚だったのかもしれない。

けれど、確かなのは、それを見た男に、黒く、深く、濃い、怒りが湧き上がったと言う事実。

男は目を覚ましました。

——幼い子ども達が死んでいく中、何だあの光景は！？ なぜ、

あいつらはああも笑っていられる。何故幸せそうにしている。なぜ、あの地だけがああも満たされている。

——知らなければ、自分に関係が無ければそれでいいのか！？

それが事実だと言う確証は何処にもありません。

けれど、自責の念に苛まれ、心に大きな空洞を作った彼には、そ

んなことは関係無かったです。
がらんどうの心に、怒りが注がれていきます。
赦せない、と。

さあ、これでお話はお終い。

え？ 中途半端だって？

そうよ。だって、これは《幻想》だもの。

唯、心に思い描くだけの、《無いモノ》だもの。

この先のお話がほしいのなら、【あなた】が思い描けばいいの。

【わたし】が全てを語ってしまうと、それはもう《無いもの》じゃなくなる。

それは《幻想》でないこととⅡなの。

ああ、そうね。じゃあ、幾つか大事なことを教えてあげましょう。

時間は流転しないわ。

時間は〈一瞬〉〈一瞬〉の連なりなの。

これは、〈過去〉の事だと言い切れないわ。

これは、〈未来〉の事だと言い切れないわ。

これは、もしかしたら〈現在〉のことかもしれないわ。

これは、ただの絵空事でしかないかもしれない。

けれどね。いつ起こってもおかしくないことなの。

その時、【あなた】はどうするのかしら。

ああ、いけない。ついお喋りが過ぎたわね。

けれど、これで本当にお終い。

あとは【あなた】が描くといいわ。

男のことでも。

楽園のことでも。

幸福のことでも。

不幸のことでも。

死んでいった、子供たちのことでも。

そんな顔をしないで頂戴。

【わたし】は最初に言ったわ。

忠告を、したでしょう？

【あなた】は【あなた】で決断してここまで聞いたのよ。

【わたし】が責められる謂れは無いわ。

——最初に言ったでしょ？

——ファンタジーにもなれない《幻想》だと。

それでは、ごきげんよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1823b/>

2010年11月30日03時24分発行